

橋村りかと声なき声をつむぐ会（後援会） ニュース

第26号 2026年8月発行



「だれひとり置き去りにしない」防災と支援の現場へ

2026年熊本地震の経験を力に

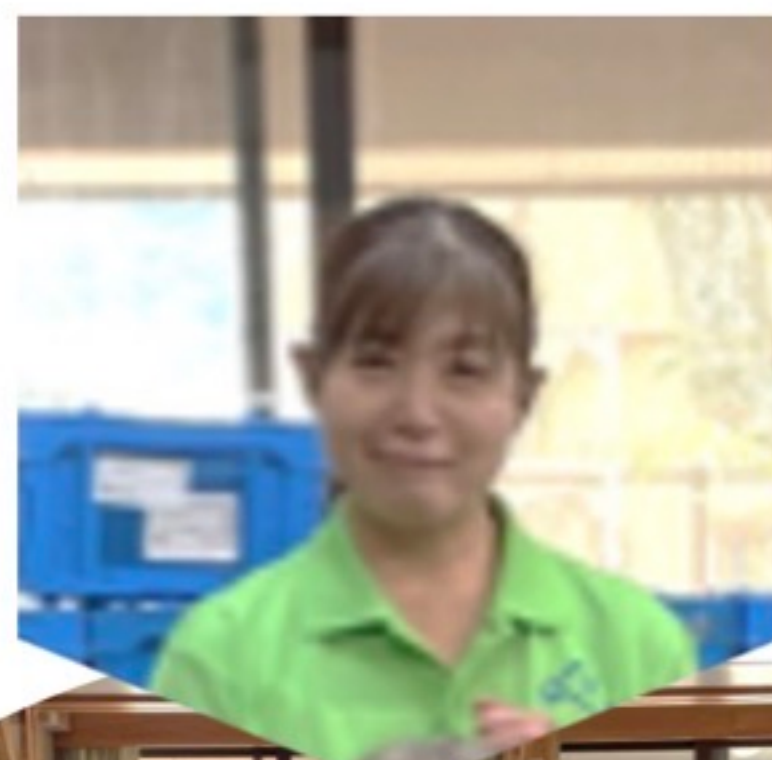
—県南の被災現場を橋村りかが訪れて

このたびの震災により被害を受けられた皆さまに、心からお見舞い申し上げます。一瞬にして日常が奪われ、深い悲しみと不安の中にいらっしゃる方々に寄り添い、少しでも力になれるよう、つむぐ会としても、現場での支援と提言に全力を注いでまいります。

10年前の熊本地震で、自らも全壊した自宅で不安に震え、医療的ケアを必要とする障害のあるわが子を抱えて必死に命をつないだ橋村りか。あのとき、公的な福祉制度や支援が機能せず絶望的な状況のなか、手を差し伸べてくれたのは、障害当事者団体が立ち上げた民間の支援ネットワーク（被災地障害者支援センターくまもと）でした。そして今、再び起きた震災の現場で、行政の支援体制の隙間にこぼれ落ち、声を上げられずに孤立している方々がいいます。

「あのとき助けられた私だからこそ、今、動かなければならない」「行政の手が届かない場所にいる人たちの『声なき声』を掬い上げ、命と暮らしを守りたい」そうした強い想いと危機感を胸に、7月29日、橋村りかは当時、被災地障害者支援セン

ターを立ち上げたすメンバーと共に、八代市の被災地へと向かい、現地から被災の現状をお聞きかせいただきました。



八代の福祉事業所「とら太の会」への状況調査に参加したKDFの仲間前列左が「とら太の会」代表理事の山下さん



■ 地域の「繋がり」こそが、

本当のインクルーシブ防災

「自助・共助・公助」と言われながらも、実際には「自分で逃げられない人は自己責任」と切り捨てられるような社会であってはなりません。橋村が地元地区で実践してきた避難訓練では、あらかじめ歩行が困難な方を訪ね歩いて声を聴き、当日は子どもたちが引くりヤカーや車椅子でお迎えに行きました。そこでは「何年ぶりかねえ」と再会を喜ぶ笑顔が弾け、途切れていた地域の繋がりが再び結ばれました。

「防災とは、誰ひとり置き去りにしない地域をつくりだすこと」

八代での調査を通じて確信したこの思いを、橋村りかは政治と社会の場へしっかりと届け、制度の壁を打ち破る施策へとつなげてまいります。

■ 後援会（声なき声をつむぐ会）の 皆さまへ

制度が追いつかない場所で今まさに困っている人に寄り添い、現場で汗をかきながら一步を踏み出す——それこそが、橋村りかの原点であり、「声なき声をつむぐ会」のめざすところです。

これからも皆さまと共に、共に生き、助け合える強い社会の実現に向けて歩みを進めてまいります。引き続きのご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

防災とは、 誰ひとり置き去りにしない 地域をつくりだすこと



▲橋村は、ナビを活用して混雑を避け、目的地に一番のりでした。支援のための移動の在り方を身をもって提起しました。

たずねた八代の福祉事業所の把握している状況を聞きながらメモをとる橋村▼



橋村りかが副代表をつとめている
社民党では熊本地震支援金の
受付もしています。ご協力をお願いします

2026年熊本地震 支援金にご協力を

【郵便振替】00180-4-602982
口座名：社民党・災害救援カンパ
（＊通信欄に「熊本」とお書きください）。
【ゆうちょ銀行】
支店：〇一九（ゼロイチキュウ）店
口座番号：0602982
名義：社民党・災害救援カンパ
（＊メッセージ欄に「熊本」とお書きください）